

一つの伝記論 (3)

安 達 肆 郎

目 次
序
一
二
三 利用された伝記
四 好事家の伝記
五 文学的伝記
六 歴史的伝記
七

} 以上本号

六

1

歴史(学)的狙いで書かれた伝記がある。これを「歴史的伝記」と呼ぶことにする。

この種の伝記も古来広く世に行なわれていた様⁽¹⁾で、その為か、今日でも「伝記は歴史記述の一部である」といわれる場合がある。⁽²⁾

さて、「歴史的伝記」について、そこにおける筆者の主人公に対する関心が、「伝記者独得の関心」といえるか否かを検討するのがこの章のわれわれの課題であるが、この検討に入るまえに、順序として、1. いわゆる「歴史的狙い」の内容は如何なるものかを明らかにし、2. その様な「歴史的狙い」によって書かれた「歴史的伝記」の実例を示そう。

まず、所謂「歴史的狙い」の内容の探究から始める。

さて、一概に「歴史的狙い」といっても、その内容は、筆者によってまちまちである。それで、ここでは、典型的な「歴史的伝記」の筆者について、それを見てゆこう。

ランケは、周知の様に、いくつかの伝記を書いているが、彼は、それらを集めた彼の全集 (Sämtliche Werke) 第40、第41巻を『歴史的・伝記的研究 (historisch=biographische Studien)』と名づけている。

してみると、ランケが「伝記」を書くのは、彼の歴史研究の一部であり、「伝記」そのものは、彼の作品 (その一部) なのである。要するに、ランケにおいては、「伝記」を書くことは歴史研究の一環なのである。そのことを、いま、「伝記」の筆者の狙いとしていいなおすと、ランケは、「伝記」を書く際に、歴史 (学) 的狙いでそれを書く、ということになる。

では、ランケが伝記を書く際の「歴史 (学) 的狙い」は、具体的には如何なる内容のものか。ランケの「歴史的狙い」は、総じて「歴史的伝記」の筆者の「歴史的狙い」の典型と思われるので、以下やや詳しくそれを省みる。

さて、彼の「歴史的狙い」に関連して、ランケは『歴史的・伝記的研究』の序文で次の様にいう。「人は、標題の『歴史的・伝記的』という言葉の結びつけ方を非難して、伝記的なものはすべて歴史的であらねばならぬ、というかも知れぬ。然し私は、右の標題によって、諸個人と共に彼が属する時期 (die Epochen) を考察せねばならぬということを示そうとしたのである。……人々を彼等の時期において、時期をそれに属する人々において考察せねばならぬことを示そうとしたのである。」⁽³⁾

ランケは、また、「伝記的なもの」と「歴史的なもの」とを区別しながら、「しかも、一般に歴史的なものは、伝記的なものと結合されねばならぬ」とも⁽⁴⁾主張している。

これらの言葉は、ランケの「歴史的狙い」の内容をつづめたかたちで示している様に思われるので、次に、これらの言葉に含まれている意味内容を、右の「序文」の他の箇所を手掛りにして、展開してみよう。

a. それはまず、ひとは、特に歴史家は、この巻に収めた伝記の主人公達の生涯が個人的契機と世界的契機 (個人の意志と「時代」の動き、個人の内的衝動と境遇、個人の自由と国家、父子の間の感情と世界情勢) との絡み合いであ

ることを注意すべきだ、一般に、歴史的事実は、普遍的契機と個人的契機との絡み合いであるが、ここにとりあげた主人公達の生涯は、その「絡み合い」の実例なのだ、といおうとしているのである。

実際に、ランケがここに収めた伝記の主人公達の生涯は、その様な個人的契機と世界的契機との種々の絡み合いの典型的な場合である。ランケは、「序文」の終りに、わざわざそのことを指摘して読者の注意を喚起している⁽⁵⁾。

b. ランケがここに収めた「伝記」でとりあげた典型的な「絡み合い」は、単なる絡み合いではない。ランケは、「後になってからの省察である」と断わってであるが、「序文」の中でお次の様にいう。

歴史における「あらゆる大規模な活動 (jede grossartige Thätigkeit) は、いつも人間世界を分裂させる一般的対立との共感から生じる。(だから個人の) 大きな活動は、支配的諸勢力の抗争のまっ只中に展開してゆくのであるが、ある重要な個人 (ein bedeutender Mann) がこの抗争にあずかる分前は、彼の内奥の衝動に基づくのはもとよりだが、然し同時に、彼がその下に行動する境遇にも基づくのである。」と。明らかな様に、ランケは、特定の個人が分裂した諸勢力の抗争を共感し、それに参与することを通じて歴史上大きな活動をする場合があるが、その場合の「参与」の仕方は、一方、その個人の内奥の衝動と、他方、彼が行動する境遇 (例えば彼が属する「時期」) の双方に基づく、即ち、彼の個人的契機と世界的契機との絡み合いを通じてである、というのである。

ランケが、ここに収めた伝記で考察し解明した「絡み合い」は、この類の絡み合いの一種と考えてよい。ランケがここで伝記の主人公としてとりあげた個人は、必ずしも歴史における「重要な個人」とはいえぬし、彼等が諸勢力の抗争に参与して果した働きは、歴史上の「大規模な活動」とまではいえぬかも知れぬが、それに類した個人、それに類した活動といってよいからである。とすると、前述 (a) した「絡み合い」は、ただの「絡み合い」ではなくて、右述した「絡み合い」と同様の、重要な歴史的意義をもった「絡み合い」と考えてよいであろう。例えば、ランケはここに収めた伝記の主人公の一人サヴォナローラについて次の様にいう。「サヴォナローラにおいて、近世史の最も生氣潑刺

たる時代の一つにおける、法王権の実際と理想の対立が現われる。彼は15世紀の宗教会議的傾向に従い、16世紀の宗教改革者の先駆であるが、然し、それ自ら極めて高度の個性と独創性をもっている。かの時代の世界勢力との結合によって彼は亡ぶ、だが彼は不滅の記憶を残したのだ⁽⁷⁾と。

してみると、ランケの先述した言葉は結局、歴史家は、個人の生涯が示す個人的契機と世界的契機との「絡み合い」が歴史的に重要な意義をもつ場合があることを注意し、その様な「絡み合い」をよく考察すべきだ、自分が「伝記」を書いたのは、その様に歴史的に重要な意義をもつ個人の生涯における「絡み合い」に着目し、その「絡み合い」を考察し解明する為である、といおうとしているのである。(実際にランケはこの巻に収めた伝記において、右述したサヴォナローラの他にも、「歴史的に重要な意義をもった絡み合い」、例えば、その時代(時期)の諸勢力の対立抗争にまきこまれ、自己の生涯においてその対立抗争を體現し、それを浮彫りしつつ、しかも同時に、彼の死が抗争から生れ出る新しい時期を予感せしめる様な個人<例えばコンサルヴィやドン・カルロス>をとりあげ、彼等の生涯における個人的契機と世界的契機との「絡み合い」を詳しく考察している。―後述)

以上は、ランケが『歴史的・伝記的研究』の序文の冒頭に述べた言葉が含む具体的意味内容である。この中に、彼が伝記を書いた根本的な「歴史的狙い」の内容が種々のかたちで現われている様に思われるので、次にその見地からその「意味内容」を省みよう。

さて先ず、右の「意味内容」を、伝記の筆者の狙いの現われとみると、どうなるか。その見地から右の「意味内容」を要約してみよう。

a. ランケが伝記を書いたのは、総じていえば歴史研究の為、内容に即していえば、特定の「個人(伝記の主人公)」を彼等の「時期」において、「時期」をそれに属する「個人」において考察する為である。更に具体的な内容に即していえば、個人的契機と世界的契機とが絡み合ういくつかの典型的な個人の生涯について、その「絡み合い」を考察し解明する為である。

b. 主人公として何人か特定の個人をとりあげたのは、それらの個人の生

涯が歴史的に重要な意義をもつ「絡み合い」を示していると解されたのである。

いま、右の「狙いの現われ」を、伝記の筆者(ランケ)の身になって、彼が伝記を書く際の彼のこころの動きに即してみなおすとどうなるか。その特徴を次にあげてみよう。

(1) 「伝記」を、歴史研究の一環として(その結果は作品となる)書くという希い。⁽⁸⁾

(2) 特定の個人の生涯を、歴史的に重要な意義をもった個人的契機と世界的契機との絡み合い、とする解釈。⁽⁹⁾

この「解釈」は二つある。

a. 特定の個人の生涯が、歴史的に重要な意義をもつ力や流れと個人の内の衝動、感情等とが絡み合う核になっているとする解釈。

b. 特定の個人の存在や働きが、歴史的に重要な影響力をもつとか、特定の個人の運命が、新しい時期の始まりを予告するとする解釈。⁽¹⁰⁾

(3) 特定の個人の伝記を書く(彼の生涯を考察する)ことによって、特定の歴史的に重要な個人的契機と世界的契機との絡み合いを解明しようとの動機。

以上の様な伝記の筆者の「希い」「解釈」「動機」の核になり、また、それら凡てを生む源泉となったもの、即ち、その際の筆者の心の動きの元(原動力)、それが——ランケの場合と限らず——総じて典型的な歴史的伝記の筆者の「歴史的狙い」である。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

2

上述の様な「歴史的狙い」によって書かれた伝記がわれわれのいう「歴史的伝記」である。次に「歴史的伝記」の実例として、ランケが書いた『ドン・カルロス』をとりあげ、前述した「歴史的狙い」の内容(現われ)を筆者のこころの動きに即して更に具体的にみてみよう。

われわれは先に(小論第三章)、ドン・カルロスの死(1598年)後間もなく、様々の『ドン・カルロス伝』が、ヨーロッパの各国であいついで公刊されたこ

と、それらはみな公正な立場で書かれた伝記ではなくて、政治的に利用する為に、都合のよい資料のみをとりあげ、都合のわるい資料は伏せた伝記であることをみた。

この様な伝記(「利用された伝記」)が書かれれば書かれるほど、ドン・カルロスをめぐることの真相は、いよいよ深い霧に覆われてしまう。ところが、それから260年後、ランケがドン・カルロス事件を問題とした頃になっても、依然、昔の古い伝記(フランスで発刊されたもの)⁽¹³⁾が世に行なわれていた様であるから、ことの真相はその頃になっても霧に覆われたままだったのである。ランケの『ドン・カルロス』は、この様な状況の中から生れた。

さて、ランケは『ドン・カルロス』の冒頭次の様に述べる。スペインの太子ドン・カルロスの事件は、「歴史家が数々の努力を重ねたにも拘わらず、今日なお闡明を要し、且つ探究に値いする事件」⁽¹⁴⁾の一つであり、「われわれ歴史家が繰り返し折にふれて取り扱いながら、真の意味では究明し得なかった有名な問題なのである」⁽¹⁵⁾と。

ランケの『ドン・カルロス』は、右の様な「事件」を「探究」し、右の様な「問題」を「究明」したもののなのである。その様な事件の探究、問題の究明の為になされた歴史研究の結果(作品)なのである。

さて、『ドン・カルロス』は、第一部「批判的論述」、第二部「ドン・カルロス伝」の二部からなる。「批判的論述」は、伝記ではないが、それを第一部として「ドン・カルロス伝」に先行させたところに、「ドン・カルロス伝」を書いた筆者(ランケ)の希いの性格が端的に現われている様に思われる。とまれ、先ず、その「批判的論述」を考察しよう。

「批判的論述」は、1.「これまでの諸叙述の分析」、2.「最も重要な論点の検討」からなる。具体的にいうと、ここで先述した対立する諸国で刊行された多数の『ドン・カルロス伝』が用いた資料、また、伏せて用いなかった資料が分析され批判される⁽¹⁶⁾。然し何の為に。これについて、ランケは次の様にいう。「私はこの論述(「批判的論述」)において、まず、これらの諸報告(資料とされた諸報告)にみられる分裂(対立)の種々相が当時の国家対立そのままに現われている点を明らかにしたいと思った。そうすれば、事実の解明、問題

となっている二、三の事柄を解明する為に、右の諸報告にみられる分裂対立にとらわれることなく、自由に探究の道を進むことになろうから。⁽¹⁷⁾

これによってみると、「批判的論述」を先行させて、「ドン・カルロス伝」を書いたランケの意図（もくろみ）は、ドン・カルロス事件に関する諸報告の偏りや、諸報告間の分裂対立からも、また、それらの筆者が捕われていた当時の諸国家、諸勢力の対立抗争からも解放されて、自由に、ありしがままのドン・カルロス事件の真相を究明することであった、と思われる。実際に、ランケは従来の諸資料を分析、批判した後、「批判的論述」を次の言葉でしめくくっている。「われわれは、両側に脱線して行く諸見解に対して、それらの中心に（正しい見解を）つきとめられると思っている。事柄はおこったままに見出され得、諸事件はありしがままに認識され得、かくしてこれらを基にして、一般的諸発展が……忠実な研究によって認識され得ると思っている。⁽¹⁸⁾

右の様なランケのもくろみ（むしろ希い）は、これをランケ自身の言葉でいえば、「それは本来如何にあったかを示すこと」である。⁽¹⁹⁾ 周知の様に、これは、彼の処女作以来終始変らぬランケの歴史研究の希いである。

してみると、『ドン・カルロス』は根本的には歴史研究として書かれたのである。このことは然し、先述した『ドン・カルロス』冒頭のランケの言葉が既に示唆していたことで、われわれはいまその示唆を『ドン・カルロス』の構造（「批判的論述」を先行させるという構造）によって、確認したにすぎぬ。

然し、この様な歴史研究の希いは、『ドン・カルロス伝』の「歴史的狙い」の一つの現われにすぎぬ。『ドン・カルロス伝』は、それを一つの現われとする「歴史的狙い」で書かれた「歴史的伝記」の典型の実例である。

3

では、『ドン・カルロス伝』において、ランケの「歴史的狙い」は、更にどのような形で現われているか。次にそれをみよう。

1. 波瀾に富んだドン・カルロスの生涯を、一つの事実として歴史家の眼で研究し、「それが本来如何にあったか」を解明するという前述したランケの希いは、この伝記を書いた彼の根本的な「歴史的狙い」の現われの一つである。⁽²⁰⁾ それは、「利用された伝記」「好事家の伝記」「文学的伝記」の筆者の希いの何

れとも異なった、この種の伝記の筆者独得の希いである。前述した「序文」でもランケは「私の本来の課題は事実の探究であった」という⁽²¹⁾。

2. 「歴史的狙い」の現われの第二は、主人公の生涯に対する独得の解釈である。

さて、右述の様な希いで書かれた「ドン・カルロス伝」が、ありしがままのドン・カルロスの生涯を描こうとしているのは前述の通りだが、「ありしがままの」といっても、そこには当然、事実と事実とをつなぐ筆者の洞察（解釈）が加わる。否、そもそもある事実をとりあげるには、その事実に対する筆者の解釈が先行する。「ドン・カルロス伝」におけるその様な洞察（解釈）で目立つのは、筆者が、ドン・カルロス父子の対立と当時の世界（諸国、諸勢力の対立抗争）との絡み合いを強調していることである。ランケは、ドン・カルロスの生涯、その主軸をなす父王フェリペ二世との対立抗争の背後に、当時の諸国、諸勢力の対立抗争がある、と解釈する。ランケによれば、その対立抗争が父子の性格上の対立、信仰上の対立、政治に関する意見の対立に絡みつき、それを激化し終に父子をのびきならぬところまで追いつめる。ドン・カルロスの生涯に互る父王との敵しい、いたましい争い、その為の苦悩、悲惨な最後は、主として、当時の諸国、諸勢力の対立の所為である。ランケは、その様な「絡み合い」をいくつもあげた後⁽²²⁾それらを総括して次の様にいう。「全般的な世界情勢とその中に内在する未来に対する諸問題とが注目される場合、一方の側にフェリペ二世が、他方の側には彼の子ドン・カルロスが立っていたということは否定しがたい⁽²³⁾」と。また、先述した「序文」でも、「私が取り扱う他の人物も、他の仕方ではあるが、⁽²⁴⁾普遍的な世界関連の中で行動する。……最後にふれる父子（ドン・カルロス父子）の痛ましい争いは、特にこの争いが組み込まれているかの時代の大きな諸事件との関係を通じてその意味をもつのである⁽²⁵⁾」という。

3. ランケは「批判的論述」の中で、ドン・カルロス事件は、「近世史のうちの最も重要な諸時期の一つで、その転換期であることを想起せしめる時期のものである⁽²⁶⁾」という。先述の様に（註<20>参照）、ランケは『ドン・カルロス』を書いた当時、特に16世紀中葉（「ドン・カルロス事件」がおきた時期）

の南欧諸国の対立抗争に深い関心をもっていたが、イタリアへの調査旅行によって、それについての認識は深められ、今やその対立抗争の時期を、近世史の最も重要な一時期と、しかも転換期と解するに到りその時期の実情と、そこにおける新しい時期の胎動の解明を問題として強く意識していたのである。

その様なランケが、ドン・カルロスという個人をとりあげ、彼の伝記を書いたのは一体何故、また如何なる動機からであろうか。

前述の様に、ドン・カルロスの生涯の諸事件は、彼が属する16世紀中葉の諸国諸勢力の対立抗争と彼の個人的諸条件との絡み合いの結果であって、彼の生涯は右の「対立抗争」を、いわば体现している。のみならず、ドン・カルロスは、先述の様に、右の絡み合いを通じて諸国諸勢力の相互関連の形成に参加しているから、当然、新しい次の時期への転換の胎動にも参加している。

この伝執筆当時ランケが抱いていた前述の様な問題意識と、ドン・カルロスの生涯の右述の様な歴史的意義を思い併せると、『ドン・カルロス伝』を書いたランケの動機は、次の様なものであったに違いない。即ち、一方、ドン・カルロスの生涯を考察することによって、そこに体现されている彼の時期の諸国諸勢力の対立と相互関連の実情を解明し、他方、彼の悲惨な最期（諸国諸勢力との絡み合いの結末）を記すことによって、彼の時期が新しい時期への転換期であることを明らかにし且つそれを象徴的に表現したいと思ったのが動機であったと思われる。ランケの言葉をまねていえば、「近世史の最も重要な時期を、それに属するドン・カルロスという個人の生涯によって解明し、その時期の特徴を彼の悲惨な最期によって象徴的に表現しようと思った」のが直接の原因（動機）であった、と思われる。

『ドン・カルロス伝』における右の様な筆者の「希い」、「解釈」、「動機」は、自らひとに、それらを結びつけている一つの中心を、しかもこの伝を書く筆者の心を全面的に支配している一つの「中心」にして、それら凡てを生み出す一つの源泉となったものを思わせずにはおかぬ。筆者のうちなるその様な「一つの中心」、「一つの源泉」こそ、この伝を書く筆者の「根本的な狙い」である。それは、右の「希い」、「解釈」、「動機」の性格からみて、「歴史（学）」

的狙い」⁽²⁷⁾と呼ばれてよい。

また、この伝記における「歴史的狙い」の性格（筆者の「希」い等々心の動きの源泉にして筆者のこころを全面的に支配するという性格）からみて、ランケがこの伝を書いた原動力となったのは、この「歴史的狙い」であることは間違いない。

4

以上、「歴史的伝記」を書く際の筆者の「歴史的狙い」とその内容（現われ）を実例について具体的にみてきたが、われわれの問題は、先述の様に、右の様な「歴史的狙い」を原動力とする「歴史的伝記」の場合、筆者の「主人公に対する関心」は、実際に如何なるものになるか、である。次にその「主人公に対する関心」の実情を、前述した「歴史的狙い」の具体的内容と対比しつつ、ランケの『ドン・カルロス伝』についてみてみよう。

さて、『ドン・カルロス伝』におけるランケの「歴史的狙い」は、先述の様に、ドン・カルロスの波瀾に富んだ生涯を、その時代（期）の諸勢力の対立抗争とカルロス個人の諸事情との絡み合いを体现したものと解釈し、その「生涯」を歴史家の立場で考察し記述することによって、彼の時代の諸国諸勢力の対立抗争の実情を解明し、また、そこに新しい次の時期が生れつつあることを象徴的に示すにあった。

そこで、この伝では、筆者は主人公の行跡、事績のうち、右の「狙い」に対応して、主として当時の南欧の対立抗争する諸国諸勢力関係と絡んだものを取りあげて詳しく考察し、そうでない行跡、事績には、主人公自身にとっては重要と思われるものでも、全く触れないか、軽く触れるだけである。例えば、「ドン・カルロスの素性」「幼少年時代」が、彼の両親及び両親の素性をめぐる諸国諸勢力関係との関わりの中でとりあげられ詳述される⁽²⁸⁾。また、ドン・カルロスの結婚に関する諸案が、やはり当時の国際関係との関わりにおいてとりあげられ詳述される⁽²⁹⁾。ところが、ドン・カルロス自身にとっては更に重要な意味をもつ筈の、彼の師や友人に関しては、筆者ランケは冷淡である。即ち、ただ父王フェリペ二世が師として彼につけたオノラト・ファン、監督者としてつけたディートリッヒシュタインに⁽³⁰⁾——彼等と法王、皇帝（神聖ローマ皇帝）との関

係を顧慮して——言及するだけである。皇太子といえども、その様に政治と関わりのない師や自ら選んだ友があった筈。それらに一切触れないのは偏りである。

この様な行跡、事績のとりあげ方の「偏り」は、筆者の太子に対する関心が、彼の「歴史的狙い」を介しての間接の関心であり、また、その為に一面的になり、且つ弱められていることを証する。

この様な「偏り」は、行跡、事績のとりあげ方ばかりでなく、行跡、事績に対する筆者の解釈の仕方にもみられる。実例をあげよう。

フェリペ二世は、1568年1月17日、終に太子(ドン・カルロス)を王宮の一室に監禁する。これは直接には、太子が計画していた国外への逃亡を防ぐ為であった。とまれ、ランケはこの一連の事件を、太子とフェリペ二世との対立と諸国諸勢力の対立との絡み合いによって起こった、と解釈する。ランケによれば、太子の「逃亡計画」は、太子が宮廷から遠ざかることによっておこる筈の諸国諸勢力への政治的影響を狙って、また、それを当てにして練られているのである。⁽³²⁾そして、王による太子の「監禁」も同様に、「逃亡計画」に関わりをもつ諸国諸勢力への顧慮からであった。実際に、王は監禁の翌日直ちに事件を諸外国へ通知し、国内の諸都市諸族にも通知している。⁽³³⁾

然し、右の一連の事件は、ただそれだけのものではなくて、当事者(国王と太子)にとっても大きな痛手であった筈。自分の子を監禁して、終に死に到らしめた王が、親としてどの様な苦しみを感じたことか。ランケはそれには全く触れない。ランケは、王が法王の慰めの言葉に涙を浮べたとか、外国の使臣に対する文書の中で「父として子の為に受けた心痛」に触れている、というが、⁽³⁴⁾法王や外国の使臣に対して悲しんでみせるのではなく、自分自身でどの様に苦しんだか、悲しんだかには全く触れない。彼は、その「触れない」ことの言い訳として、次の様な王自身の冷たい性格をあげているが、信じがたい。

「真の思いやり即ち子の自主的でない状態に対する同情、心ならずも何かと不規則な子の行為一切に対する同情、そういう同情の痕跡を我々は彼(王)に見出さない。フェリペ二世は、彼の抱く絶対君主制宗教的体系の観念の中でのみ

生きていたのである。⁽³⁵⁾」

他方、国外逃亡を計画し、それに失敗して監禁された太子（ドン・カルロス）個人の心情（父王への怒り、裏切ったオーストリア太子ドン・ヨハンや廷臣の誰彼への怨み、逃亡計画への反省、自己自身に対する後悔、そして絶望）⁽³⁶⁾には一言も触れない。

1568年5月初旬、1月以来監禁されたままの太子は、漸く「懺悔する気になった。また、やむなく父に謝罪を乞うた。⁽³⁷⁾」あれほど父に反抗していた太子が、父に謝罪し神に懺悔する気になったのは、気持の大きな転換である。そこに到るまでの彼の迷い、苦悩、最後に諦めと決断とは容易なことではなかった筈。ランケは然し、ドン・カルロスのこの様な内面には一切立ち入らない。

7月、太子は病気になる、自分でも恢復の見込みがないことを覚る。7月14日、「彼は懺悔する機会がなお彼に与えられるようにと、懺悔僧に神への代願を乞うた。⁽³⁸⁾」そして、次の「4日間を平穩に自分の死の準備に捧げた。⁽³⁹⁾」

ドン・カルロスのこの様な行状は、彼が苦悩を通じて人間的に大きく成長したことを示すものであろう。ところがランケは、ただ太子の右の様な行状のみを日付けを追って述べた後に、それを太子の「肉体の衰え」の所為にして次の様にいう。「ドン・カルロスはいかに、死に直面して初めて平静を取り戻した。彼の嵐の様な魂の激動は肉体の衰えと共に初めてその狂暴を止めた」⁽⁴⁰⁾と。結局、ランケはドン・カルロス個人の死に臨んでの心情や、人間ドン・カルロスには一顧も与えないのである。⁽⁴¹⁾そして、その代りに、太子ドン・カルロスの死が国内から、また、国際的にどの様に受け取られたかを詳しく述べる。⁽⁴²⁾

右述した、ドン・カルロスの行跡、事績に対するランケの解釈の仕方の偏りも、主人公に対するランケの関心が「歴史的狙い」を介しての間接の、且つ一面化され弱められた関心であることを証する。

以上、『ドン・カルロス伝』の分析から明らかになった、「歴史的狙い」を原動力とする伝記の筆者の「主人公に対する関心」の実情は、その性格に注目

して一般的にいえば次の様になる。即ちそれは a. 筆者の「歴史的狙い」を介しての間接の関心であり、b. 「歴史的狙い」に従属する二次的で弱められ一面化された関心である、と。

この様な筆者の実情は、これを生み出した筆者の精神の態度、経験に戻していえば次の様になる。即ち、この場合にも、——「文学的伝記」の場合同様——筆者はその全人をあげて、直接に主人公そのひと(全人)を共感しているのではなく、歴史的立場で歴史的希い、歴史的動機、歴史的解釈を介して主人公を捉える。筆者は主人公に直接しているのではなく、いわばその外に立って(距離をおいて)、しかも特定の視点から主人公をみている。主人公に対する関心は間接の二次的関心となり、その為に弱まり且つ一面的にならざるをえない。

他の「歴史的伝記」の筆者の主人公に対する関心についても、内容、程度の違いはあれ、形式的には大抵右述と同じ実情がみられる。

5

以上、「歴史的伝記」の筆者の主人公に対する関心の実情をみたが、われわれの次の問題は、右述の様なその関心が、果して伝記者独得の関心といえるか否かである。

さて、「歴史的伝記」においては、右にランケの『ドン・カルロス』についてみた様に、筆者には、伝記を書く気持の底に、伝記をその為に利用する特定の目的や、伝記を書くことによって充たされる筈の主観的好みや欲求があるわけではないが、それに替って、伝記を書いて達成すべき「歴史的狙い」がある。そして、実例について確認した様に、それが筆者に伝記を書かせた原動力⁽⁴³⁾である。

とすると、この際、筆者の第一の、また、主たる目的は、「歴史的狙い」を達成することであって、主人公の為に伝記を書くことそのことではない。主人公の伝記を書くのは、「歴史的狙い」の達成という目的に従属する、いわば二次的目的にすぎない。

してみると、「歴史的伝記」を書いている限りでは、筆者は何よりも先ず歴史家であって伝記者ではない。少なくとも、伝記者である以上に歴史家であ

る。彼にとって、伝記は主人公の伝記である以上に、彼の作品（歴史的研究の成果）である。それ故、「歴史的伝記」の筆者の主人公に対する前述の様な関心は、歴史家の関心であって、これを伝記者独得の関心ということとはできない。

6

然し、前節でみた「主人公に対する筆者の関心の実情」については、まだなお検討すべき問題が残っている。

a. われわれが「歴史的伝記」と呼ぶのは、形式上「歴史的狙い」がその伝記を書く原動力となっている場合である。また、先にみた「主人公に対する筆者の関心の実情」は、前述の様に『ドン・カルロス伝』の中、特に筆者の「歴史的狙い」が顕著に現われた叙述を分析したものである。分析の結果が前述のようになるのは当然である。

何れにせよ、前述したのは、「関心の実情」といっても、外から窺い知ることができる限りの実情でしかない。そこで、果して「歴史的伝記」の筆者のところが全面的に「歴史的狙い」に支配され切っているか否かがなお、問題である。

形式的には、また、みえる限りではそれが原動力であるとしても、実質的に、外から知りえない、分析の及ばない心のどこかに、それに支配され切らない、主人公に対する直接の独得の関心が、ひそかに原動力の一部として、なお残存していないかどうか、換言すれば、筆者の、主人公に対する関心の実情は、前述の様な「歴史的狙い」に従属する二次的関心に尽きるかどうか、それが問題である。

b. われわれが分析した『ドン・カルロス伝』以外の「歴史的伝記」においても、「歴史的狙い」と「主人公に対する筆者の関心」との関係は常に前述の場合と同様であろうか、それがなお検討、確認されねばならぬ。

さて、右の二点に関連して、われわれの所謂「歴史的伝記」の筆者は、一般に伝記を歴史的研究の一環として書くこと（前述）、また、従って伝記を彼の作品として意識することが注意されねばならぬ。

a. 伝記を「歴史的研究」の一環として書くという態度、希いは、前述の様

に、われわれのいう「歴史的狙い」のうちに含まれている。それは、「歴史的伝記」の筆者の立場の現われで、程度の差はあれ、一般に「歴史的伝記」の筆者にとっては決定的な（不可欠の且つ他に優先する）態度、希いである。

ところが、「歴史的[・]研究」の一環として伝記を書く際には、筆者は、主人公を時代（期）の脈絡（ランケの所謂「普遍的世界関連」）のうちにおいて考察する。この様な「考察」をするには、筆者は、主人公から一步離れて、ある視点から主人公をみななければならぬ。主人公に直接しては「考察」はできない。⁽⁴⁴⁾

b. 「歴史的伝記」の筆者は「伝記」を作品として書く。彼は「伝記」を主人公の伝記としてよりも、自分の作品として意識する。

ところが、「作品」を書くには、彼は主人公から離れて、自分の立場から主人公をみななければならぬ。全人をあげて主人公そのひとに傾倒し直接し、一人の人間として人間主人公をただ共感しては、「作品」は書けない。彼は「作品」を書く為に作者になり、主人公を作者の眼でみななければならぬ。

以上、a、bに分けて考察した様に、「歴史的伝記」の筆者には、その立場に基づく独自の「態度」、「希い」、「みる眼」がある。そして、そこからの独自の「関心」（主人公に対する関心）がある。この「態度」等々及び「関心」は、立場に基づくものとして一般に「歴史的伝記」の筆者に共通のものである。

さて、「歴史的伝記」の筆者においては、右述した「態度」「希い」「みる眼」「関心」が、独自の立場に基づくものとして伝記を書く際の原動力として常に他に優先することはいうまでもない。そこで、その際、筆者が他方で、主人公そのひとに直接し、共感し主人公そのひとに対して直接にどのような関心をもつにせよ、それは後景へ退かざるをえない。その「関心」が原動力のうちへ、先の「関心」と並んで混入することはない。右述した二種の関心は、a、bで考察した様に原動力としては両立しえないからである。（そのことは、先にランケの『ドン・カルロス伝』について具体的にみた通りである。なお、後

述参照。)

そこで、この節の冒頭にあげた疑義に関して、われわれはいまや、次の様
いうことができる。一般に、(常に)「歴史的伝記」の筆者の場合、筆者の「歴
史的狙い」に従属し切らない、主人公そのひとに対する直接の独得の関心が、
そのまま伝記を書く原動力の内に、ひそかにその一部として残存し又は、その
内へ混入する様なことはない、と。

この結論を、前節までの考察の結果と併せて、われわれは結局、次の様にい
うことができる。

「一般に、『歴史的伝記』の筆者の原動力の中には、主人公に対する伝記者
独得の関心といえる様な関心は存在しない」と。

以上、小論第三章から第六章まで、われわれは、今まで世に行なわれて来た
伝記を、それが書かれる原動力となったとみえるものに着目し、そのものの性
格を規準として分類し、a. 先ず分類された各群の代表的典型的実例につい
て、その筆者の「主人公に対する関心」が、果して「伝記者独得の関心」とい
えるか否かを検討した。また、b. 形式上原動力となったとみえる、筆者の
「目的」「狙い」「好み」の他に、主人公そのひとに対する直接の関心が原動
力の一部として筆者の心中に含まれていないかどうか、をも検討した。また、
c. 仮に「含まれていない」としても、同じことが常にその類の伝記一般につ
いてもいえるかどうか、をも検討した。

いま、以上の「分類」と、実例についてなされた「検討」の結果を、とりま
とめると、略次の通りである。

a. 以上にみて来た各種の伝記においては、筆者は特定の「目的」または、
「欲求(好み)」または「狙い」をもち、形式的にはそれが伝記を書く際の原動
力となっている。

b. 筆者の「主人公に対する関心」は、右の特定の「目的」「欲求」「狙い」
を介しての間接の関心であり、特定の「目的」等に従属する二次的関心であ

る。その為に、その「関心」は、弱められ一面化されている。

c. 特定の「目的」等を原動力として伝記を書いている限り、筆者は、伝記者である以上に、その特定の「目的」等に対応して、例えば、教育者、好事家、文学者、歴史家である。それ故、(b)に示した各種の伝記の筆者の主人公に対する関心は、何れも、これを「伝記者独得の関心」ということはできない。

d. 各種の伝記の筆者は、主人公に対して「目的」「好み」「狙い」を介しての間接の二次的関心の他に、主人公そのひとに対する直接の関心をもつ場合があるが、それらは何れも、右の「目的」「狙い」「好み」等に従属するか、または、従属しないまでもその蔭にかくれていて(後景へ退いていて)、筆者が伝記を書く原動力のうちへ、その一部として混入することはない。

e. 同じことが、検討した当の伝記ばかりでなく、その類の伝記一般についていえる。

右述の五点の中、われわれの次の課題にとってさし当たり重要なのは(c)(d)、就中(c)である。それ故、各種の伝記の筆者の主人公に対する関心は、何故「伝記者独得の関心」といえないのか、その理由をいま一度省みておこう。

以上に分類した各種の伝記の場合、筆者には、伝記を書くに先立って、伝記を書くことによって実現すべき目的、みたさるべき欲求(好み)、達成すべき狙いがある。そして、実例について確認した様に、筆者はただそれだけを原動力とし、それに基づいて伝記を書いている。とすると、これらの伝記の筆者は、根本的には、また主としてその「目的」「欲求」「狙い」に応じたそれぞれの立場で伝記を書いているのである。伝記者の立場(そういう立場がある、と仮定して)で書いているのではない。これが右の「理由」である。

とまれ、以上われわれが世に行なわれている伝記を分類し検討した限りでは、伝記の「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心は見当たらない。その様な「独得の関心」の存在は未だ確認されていない。

七

1

第二章以降のわれわれの課題は、「主人公に対する伝記者独得の関心」とい

える様な関心が存在するか否かを確認することであった。(できれば、そういう「関心」を原動力とする伝記の実例をみつけることであった。)

先述の様に今日の伝記研究(伝記論)は、「主人公に対する伝記者独得の関心」が存在することを認めていない。然し「認めていない」といっても、それは検討の結果「存在しない」と断定したわけではなくて、ただ一般の伝記の読者や伝記の研究者がそれに気付いていないというだけのことなので、実際には存在するのかも知れない。それ故、改めてそのことを問題として探究し、確かめる必要があったのである。これまで小論でして来た伝記の「分類」と「検討」は、要するにその為のものである。(小論第二章参照)

ところが、前述の様に、われわれがいままで行なった「分類」「検討」の結果では、「伝記者独得の関心」の存在は確認されなかった。尤もわれわれが試みた伝記の分類は、——私見では、今日世に行なわれている伝記の大体は以上(1)に分類した何れかの種類に属するが——完全ではないし、また、どの種類にも属さぬいわば例外が存在するかも知れない。それ故、前述の様な、われわれの「分類」「検討」の結果だけから、「『主人公に対する伝記者独得の関心』」という様なものは、何処にも存在しない、と断定することはできない。してみると、われわれの「探究」は未だ終っていないのである。

然し、果してその様な「伝記者独得の関心」はやはり存在するのであろうか。存在するとして、それは何処に(どの様な伝記のうちに)見出すことができるのか。また、われわれはそれを如何にして探し出すことができるか。

さて、一見徒労に終わったかにみえるこれまでのわれわれの「分類」「検討」の作業の経過及び結果が、右の最後の二点について、有力な示唆を与えてくれる。次に、その「示唆」に従って、これからのわれわれの探究の方向を探ろう。

2

私が、これまでの「分類」「検討」に際して、筆者が伝記を書く原動力となったものが、形式上、筆者の予めの「目的」であるか「好み」であるか「狙い」であるかに従って分類しながら、しかもなお、その「原動力」のうちに、「主人公に対する伝記者独得の関心」が含まれていないか否かを問題とし、検

討したのは、第一章で詳述した様に、たとえ形式上はどうあるにせよ実際には（実質的には）、「原動力」のうちにひそかに「主人公に対する伝記者独得の関心」がその一部として含まれており、従って、その伝記は純粋に「本来の伝記」といえないまでも、実際にはそれにちかい伝記である様な場合があるかも知れぬ、と考えたからである（小論第一章3節参照）。

然し、これまでのわれわれの「検討」の経過及び結果によれば、その様な期待は見当違いであった様である。「検討」の経過を顧みると、形式上にせよ、筆者が伝記を書く「原動力」が、特定の「目的」「狙い」「好み」等である場合には、それが筆者のこころを優先して、且つ全面的に強く支配するから、「原動力」のうちへ他種の関心が入り込む余地はない（従って、その際伝記は「本来の伝記」にちかい伝記とはなりえない）からである。

してみると、「主人公に対する伝記者独得の関心」を見出す（そういう「関心」の存在を確認する）、ひいて、「本来の伝記」または、それにちかい伝記の実例を見出す為に、われわれに残された途はただ一つである。即ち、われわれはいまや、形式上も「伝記を書くこと」以外の特定の「目的」「好み」「狙い」を原動力としない伝記、言い換えると、筆者がただ「伝記を書くこと」自体を（そのことだけを）目的とし、ただそれだけを希い、ただそのことだけを狙って書いた伝記（これを、「自己目的・自足的伝記」と呼ぼう）を見つけ、そのうちに「伝記者独得の関心」を実験的方法によって（後述）探しとめる他はない。いままでのわれわれの「分類」「検討」の経過及び結果が示唆する、われわれの今後の探究の方向は右の通りである。

3

然し、ここでわれわれは、これまでのとは一つ別種の検討を強いられることになる。

というのは、ある伝記が外見上は「自己目的・自足的伝記」とみえても、実際にはその「原動力」のうちへ「伝記を書くこと」以外の特定の「目的」「好み」「狙い」等が侵入してそれを支配しているかも知れぬからである。そして、もしそうであったら、その伝記は、みせかけはともかくも、実質的には、これまでみて来た各種の伝記の同類であって、そこに「主人公に対する伝記者独得

の関心」を探しても無駄であるからである。

それ故、われわれは、性急に、ただ外見上「自己目的・自足的」とみえる伝記のうちに「伝記者独得の関心」をもとめるのではなく、それに先立って、先ず、その伝記が外見上、そう見えるだけでなく、実質的に「自己目的・自足的伝記」であるか否かを検討し確認せねばならぬ。

さて、右の「検討」の結果、もしある伝記が単にみかけだけでなく実質的に「自己目的・自足的」であることが確認されたら、その時初めて、a. その様な伝記を筆者に書かせた原動力のうちに「主人公に対する伝記者独得の直接の関心」を見出すことができよう。けだし、その際の筆者は、ただ伝記者であって、伝記者以外の何者でもないし、またその際の「原動力」のうちには、主人公に対する直接の関心が、その核心として含まれている筈だからである。また、b. この様な「自己目的・自足的伝記」は、——右述の様に、その原動力のうちに伝記者独得の関心を含んでいるから、——これを、「本来の伝記」と呼んでよい。(この様な伝記は、姿、かたち上で不純な要素を含むことがあっても、その本体たる筆者のころにおいては、本来の伝記である。後述参照) だからまた、c. この様な「自己目的・自足的伝記」の実例を、実験の手続き——⁽²⁾仮説を投入して検証する方法——によって分析して、筆者がそれを書く「原動力となったもの」を探り出したら、それを手掛りにして、第一章にあげた「伝記に関する基本的問い(その第一種即ち「伝記は本来人間精神から如何にして生れたか」という問い)」にも答えることができよう。畢竟、もし、外見上そうみえるのみならず実質的にも「自己目的・自足的」といえる様な伝記の実例をみつけ出すことができたなら、それは即ち「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在と所在を確認したことであり、その様な関心を原動力の核心とする「本来の伝記」の実例を見出したことであり、更には「伝記に関する基本的問い(その第一種)」に答える手掛りをえたことでもある。

いままで、小論の課題としてきた三つのこと(1. 「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在と所在を確かめること、2. 「本来の伝記」の実例をみつけること、3. 「伝記に関する基本的問い」に答える手掛りを見出すこと)相互

の関係が右の通りだとすると、三つの課題を一挙に果たし、小論の窮極的目的（「伝記に関する基本的問い」に答えること〈小論第一章参照〉）に迫る為に、われわれが次になすべきは、先ず「自己目的・自足的」とみえる伝記の実例をみつけ、それが実質的にも「自己目的・自足的」であるか否かを検討し確認することである。

——未完——

註

六

- (1) ブルクハルトは次の様にいう。「中世の終に到るまで、伝記として存在する多くのものは、実は、その時代の歴史にすぎず、讃えらるべき人間の個性に対する感覚もなしに書かれたものである。」（前出『イタリア・ルネサンスの文化』下、57頁）なお、註(10)参照。
- (2) 小論第一章の註(11)参照。
- (3) L. von Ranke's Sämmtliche Werke. Verlag von Duncker u. Humblot, 1877. Bd. 40-41, Vorrede V.
- (4) ibid. Vorrede V.
- (5) ibid. Vorrede VI—VII.
- (6) ibid. Vorrede V.
- (7) ibid. Vorrede VI.
- (8) 歴史研究 (Studien) は、学問として、一面では、主人公を彼が属する時代において理解しようとする試みであることはいうまでもない。いまこの点に注意するのは、「本来の伝記」の筆者の姿勢との違いを注意する為である。「本来の伝記」の筆者は、伝記を書くことによって、主人公を理解することを希っているわけではない。彼は主人公そのひとに傾倒し、主人公の伝記を書くのは、ただその「傾倒」を確認（追体験）する為である。（後註<44>参照。なお、後述参照。）
- (9) 所謂「紀伝体」（司馬遷が始めたといわれる歴史の叙述様式の一つ）は、個人の生涯に対するこの様な解釈に基づいて成立した歴史叙述の様式の一つと解されよう。（司馬遷が書いた『史記』は、周知の様に「本紀<帝王の伝記>」、「世家<諸侯の伝記>」、「列伝<庶民を含む臣下の伝記>」と、「書<志>」、「表」を以て構成される。）
- (10) マイヤー (E. Meyer) は、その著『歴史の理論と方法』の中で次の様にいう。「現代では……伝記は確かに、たとえもっぱらではないにせよ、主に歴史家によって取り扱われている」(E. Meyer, Zur Theorie und Methodik der Geschichte, 1902. 森岡弘通訳『歴史は科学か』、みすず書房、所収、77頁)

では、歴史家は、どうの場合に、どうの理由で伝記を書くのか。これについてマイヤーは次の様にいう。「対象とする個人が歴史的影響力をもっていたということが、当の人間に一個の伝記がささげられる為の前提であり理由である。」(同前、77頁)

- (11) この様な「歴史的狙い」の内容、性格が、具体的には、筆者の史観を反映したものになるのは勿論である。ここに述べた「歴史的狙い」がランケの史観を反映していることは見易い。(鈴木成高『ランケと世界史学』、孔文堂、108—109頁等参照)
- (12) 「歴史的狙い」と関連して、——伝記の分類上必要と思われるので——、ここで「歴史的狙い」に似た狙いをもった伝記や、「歴史的伝記」と似た内容をもった伝記が存在することを注意しておこう。

a. 「歴史的狙い」と類似した(analogical)狙いをもっていて、「歴史的伝記」の一種と解してもよい伝記が存する。「精神史的伝記」と呼ぶべき一群の伝記がそれである。

例えば、

W. Dilthey, *Leben Schleiermachers*, 1870.

F. Gundorf, *Shakespeare und der deutsche Geist*, 1911 ; Goethe, 1916.

L. Bertrand, *St. Augustin*, 1913 ; *St. Thérèse*, 1927.

下村寅太郎『アッシシの聖フランシス』、南窓社。

この種の伝記の筆者の狙い(「精神史的狙い」)は、「歴史的狙い」に類似する、といったが、その「類似」は、先ず a. 「伝記の主人公のとりあげ方」に関連して顕著にみられる。即ち、精神史的伝記の筆者がとりあげるのは、重要な精神史的意義をもった個人である。また、b. 主人公の事績等に対する解釈の仕方、伝を書く動機も類似する。(即ち、筆者のいう「精神史的意義」の中味は「歴史的意義」の中味と類似する。)即ち、筆者は、ある個人の存在、行跡、事績等が精神史上のある時期を象徴しているとか、その焦点となつていたりとか、強い精神(史)的影響(力)をもっていたとかいう場合に(その様に解釈される場合に)、その点に着目し、「時期」を、それに属する人に於て考察し現わすことを希つて、また、それを動機としてその個人をとりあげ彼の伝記を書く。実例をあげよう。

下村寅太郎博士の『スウェーデン女王クリスチナ』は、「バロック精神史の一肖像」という副題をもつ。また、同じ著者の「東郷平八郎」(『明治の日本人』所収)の、「後語」には、「日本の近代海軍の形成における文化史的精神史的側面が注意されねばならぬ。小論はその様な観点と関心を動機とし、東郷平八郎をその象徴とし焦点として試みた」とみえる。また『アッシシの聖フランシス』の「序」には、「フランシスの生涯は、……限りなく感動的で魅力的である。……

専ら貧困微賤の生活の説教者であったのに、この感化が忽ち燎原の火の如くに拡がり、更に偉大な芸術・思想運動を触発した。しかし、この史的奇蹟が少しも不思議でないことを感ぜしめる雰囲気はフランスにはある。その秘密は何であるか。フランスの道は極めて厳しいものであるに拘らずあらゆる階層の人々に広く且つ速かに受け容れられた。その秘密は何であるか。これには勿論歴史的・社会的条件が根底に予想されている。しかし、このポテンシャルをアクチュアルにした起動者は固よりフランスの精神的人格をまたねばならない。この伝は「キリスト教的乃至カトリックの伝統の外にある者」の「自由な立場」で「ただただ単に精神史的関心よりしたもの」である、とみえる。

b. 「記念碑的 (monumental) 伝記」と呼ぶべき伝記がある。

この場合、筆者は、主人公のことが、時とともに跡かたもなく忘れ去られるのを惜しんで、主人公を想い出させるもの即ち主人公の記念碑を建てたいとの希いから伝記を書く。

この種の伝記は、一見「歴史的伝記」と似た内容をもつが、「歴史的伝記」とは、筆者の立場も狙いも異なるから、これを「歴史的伝記」の一種とするのは適当ではない。尤も、純粋な「記念碑的伝記」は稀で、この種の伝記の筆者の心情には、「思い出」の筆者の心情に似た主人公をなつかしむ心情が含まれているのが普通である。時にはそこに「歴史的狙い」が混入する場合もある。とまれ、伝記の分類上は、「記念碑的伝記」は「思い出」と「歴史的伝記」との中間に位置するといえよう。(註七の1参照)

(13) 『ドン・カルロス (Don Carlos, Prinz von Asturien, Sohn König Philipps II. von Spanien)』(前出『ランケ全集』40—41巻所収) 祇園寺信彦訳、創文社、36—38頁及び「訳者はしがき」6頁参照。

(14) 同上、5頁。

(15) 同上、5頁。

(16) 例えば、中立の立場でなされたスペインのファン・ロペスによる「太子ドン・カルロスの死と葬式に関する報告」、オランダのオレンジ公ウィリアムによるフェリペ二世批判(「著名なウィリアム公の神助を蒙れる護教、防衛」)、これに反対して王を弁護したフィレンツェのジャン・バッチスタ・アドリアンの報告等が分析され批判された。

(17) 前出、『ドン・カルロス』8頁。

(18) 同上、46—47頁。

(19) ランケは、処女作『ローマ風・ゲルマン風諸民族の歴史 (Geschichten der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1514)』の「第一版への序文」で次の様にいう。「人は、歴史に、過去を裁き、未来に役立たしめる為に、同時代を教えるという任務を与えているが、現在のこの試み(著作)は、かかる

高い役目を引き受けるものではなく、ただそれは本来如何にあったか、を示そうとするに過ぎない(er <gegenwärtiger Versuch> will bloss zeigen, wie es eigentlich gewesen.)」。(L. von Ranke's Sämtliche Werke, Bd. 33-34, Vorrede VII) なお、前出『ランケと世界史学』(15—18頁) 参照。

- (20) 右述した「希い」(「それは本来如何にあったか」を解明しようとの希い)を、ランケが「ドン・カルロス伝」においてももっていて、それがこの伝を書いた彼の「狙い」の一環となっていたといつてよいかどうか。

その様にいう為には、右述した「希い」が「ドン・カルロス伝」の執筆に際して、単なるもくろみに止まらず実行に移されていたことの証しをあげねばなるまい。

われわれは右の「証し」として、右述の様な「希い」を実行に移す為に、なさねばならぬ資料(ドン・カルロス事件に関する資料)蒐集に関するランケの言葉と、その「言葉」を実行したランケの資料蒐集旅行をあげることができる。

a. ドン・カルロス事件を「ありしがままに解明する」為の資料蒐集に関してランケは次の様にいう。「われわれに示される証言が党派的であるならば、その証言が与える以上の確実さをうる為に、われわれは如何なる道を選ぶべきか。確実な関係書類を利用すること、事柄と密接な関係があり、それを観察した人々、しかも党派的でなかった人々、そういう人々の報告を探し求めること、それ以外に道はない」と。(前出、『ドン・カルロス』47頁) b. 『ドン・カルロス』に取りくんだ頃のランケ(34歳)は、既にベルリン大学の教壇に立つ新進気鋭の歴史家であったが、彼の当時の関心は、主として、16世紀中葉の南欧の諸国諸勢力の対立抗争と、そこに直観(展望)される統一(ランケの所謂「普遍的世界関連」<後註24参照>)に向けられていた、といわれる。とまれ、1828年から31年にかけてランケが行なったイタリアへの調査旅行は、右の「関心」に基づくものと思われる。そして、『ドン・カルロス』が、『ウィーン年報』に発表されたのは、この旅行の途中<1829年>である。

この調査旅行で、ランケは暫くウィーンに留まって「王室図書館」でスペイン宮廷の要人(フェリペ二世の頃の要人)からの書簡や「ランゴネの手記」を読んだ。また、フィレンツェ、ヴァチカンではスペイン駐在の当時の使臣から本国への報告書を読んだ。右述の『ドン・カルロス』発表の時期から推して、これは、前述した「確実な関係書類」、「事柄と密接な関係があり、しかも党派的でなかった人々——の報告」を渉猟したものと思われる。つまり、前述した彼の「希い」を実行する為の準備をしたのである。

とまれ、『ドン・カルロス伝』は、主として、これらの信頼すべき、党派心による偏りをもたぬ資料に基づいて、最終的に考え直され手を入れられたに違いない。

- (21) L. von Ranke's Sämtliche Werke, Bd. 40-41, Vorrede VII.

(22) 「オランダに対する教会政策」について、「トスカナ公の取り扱い」について、「トルコに対する援助」「僧俗結婚の許可」等について、父子は互いに、オーストリア皇帝、法王、オランダの諸侯と結んで相争った。(『ドン・カルロス』134—142頁参照)

(23) 前出、『ドン・カルロス』、141—142頁。

(24) ランケの史学は、「世界史学」と呼ばれる。それは、単なる「個別の学」とも「世界史の哲学」とも区別される。

歴史は豊富な内容をもち、多様であるが、しかも、それは常に統一をもつ。この統一(哲学の統一と異なり)、相闘うものの動的調和、互いに相容れぬものの統一、それぞれの独自性を消すことのない統一である。具体的には、民族と民族、国と国との対立抗争のうちに直観される統一である。これがランケの所謂「普遍的世界関連」又は(彼の『世界史』の「序」にいう)「世界史的関連」である。

ランケ史学は、個別の考察研究から、右述した「普遍的世界関連」「世界史的関連」の認識にまで高まる任務と能力をもった世界史学である。(前出、『ランケと世界史学』34、113、117—118頁等参照)

(25) L. von Ranke's Sämmtliche Werke, Bd. 40—41, Vorrede VII.

(26) 前出、『ドン・カルロス』5頁(傍点筆者)

(27) 註(2)参照。

(28) 前出、『ドン・カルロス』80—90頁。

(29) 同上、105—114頁、131—132頁。

(30) 同上、127—131頁。

(31) 同上、131—133頁。

(32) 同上、144—145頁、147—149頁参照。

(33) 同上、160頁。

(34) 同上、164—165頁参照。

(35) 同上、165頁。

(36) こうした「偏り」が生じたのは、一つには、資料の不足の為でもあろう。

(37) 前出、『ドン・カルロス』、169—170頁。

(38) 同上、172—173頁。

(39) 同上、173頁。

(40) 同上、172頁。

(41) この辺りのランケの叙述は、先に「文学的伝記」の実例としてあげた、ツヴァイクの『マリー・アントワネット』における、マリー・アントワネットの最後に関する叙述と対照的である。そこでは、筆者ツヴァイクは、監禁されて死に直面してからのマリー・アントワネットの人間の成長を認め、文学的見地からそれを詳述している。(小論第五章「文学的伝記」3節参照)

(42) 前出、『ドン・カルロス』、174—175頁参照。

(43) この場合も、やはり伝記が(歴史的目的に)利用された様に見えるが、この場合の伝記は、手段としての利用価値と違った独自の歴史(学)的意義(価値)を実現してゆくので、いわゆる「利用された伝記」とは異質である。

(44) スイスの歴史家ケーギ(Werner Kaegi <1900~>)は、その著『ブルクハルトとヨーロッパ像(Europäische Horizonte im Denken Jacob Burckhardts)』の中で次の様にいう。

「伝記作者に友好的な助言として提供される様々のおきての中には、肝に銘ずるに値するものが多い。『彼<伝記作者>は皮肉を慎むべきである』と例えばハロルド・ニコルソンは言う、『彼は自分の主人公に対するのに、原則的に、且つ、くりかえし批判を以てすることを自分の義務と心得てはならない』。ニコルソンは、このような言葉を、リットン・ストレーチーに対する義憤のうちに書いた。ストレーチーが自分の叙述する偉大なる故人を、しきりにせせら笑うことに対する義憤のうちに。この際彼が引き合いに出したのは、伝記ものに練達のジョンソン博士であった。『真の伝記は、読者を啓発し、鼓舞し、慰めるべきである』と博士はいった。また言う、『単に一時的でなく、永続的な影響力を持つ人物、また著者と読者が基本的に尊敬の念を抱きうる人物についてのみ』真の伝記が書かれるのである、と。

以上はすべて、全くその通りである。しかも伝記作者は、時おり次の様にせざるを得ないことも事実である。即ち、自分の描く主人公から幾らか距離をおき、自分の仕事から身をひき、彼が彫刻する像を一度はいつもと違った側面から眺め、その像を有利な光から不利な光の中に移して、その場合にこの像がわれわれに如何に働きかけるか、果してそれでもその像が持ちこたえるか否かを見るということである。」(坂井直芳訳『ブルクハルトとヨーロッパ像』、みすず書房、97—98頁)

ケーギはここに、歴史家の立場で伝記を書く際、彼がとるべき態度を語っているのである。「主人公から距離をおく」こと、「自分の仕事から身をひいて、彼が彫刻する像を……眺めること」等々。

序でに、伝記作者に対して示したケーギの右の「忠告文」の真意に関連して附言すると、

a. ケーギの忠告は、——右の「忠告文」を普通に解釈すると——ニコルソンやジョンソンの様な伝記作者が主人公に傾倒のあまり主人公の凡てを美化し、主人公に対する批判を排除し、主人公の捉え方(理解)において主観的偏見に陥ることを戒めたものである。

もし、そうだとすると、その際、ニコルソンやジョンソンの言葉を、その様に主人公に対する一辺倒を示すものと解するのはケーギの誤解である。この「誤

解」は、ケーギが本来の伝記者の立場と歴史的伝記を書く歴史家の立場との違いを無視して、伝記はただ主人公の生涯をありのままに記すべきもの、と解するところから生じたのである、と思われる。

とまれ、ニコルソンやジョンソンが前述した言葉や態度で主張しているのは、即ち、彼等の言葉の真意は、伝記者には歴史家や批評家とは異なった独自の立場がある、ということである。伝記者は本来、主人公の生涯をただありのままに記したり、それを批判したり理解したりする為に伝記を書くのではない。彼は、ただ主人公の生涯の生き方に即して主人公そのひとへの傾倒を確認(追体験)する為に伝記を書くのである。歴史家や批評家とは立場が違うのである。(後述参照)

前述の様にニコルソンがストレッチャーを非難したのも、ストレッチャーが伝記を書きながら、立場の違った批評家の様な態度をとるからである。

b. ケーギは先の「忠告文」で、ニコルソンやジョンソンの主張の真実性を認めて、「以上(ニコルソンやジョンソンの主張)は凡て全くその通りである。しかも伝記作者はときおり次の様にせざるをえない」という。この様な言葉づかいをみると、ケーギは前述した「忠告文」で、本当は、ニコルソンやジョンソンが主張する伝記者独自の立場を認め、その「立場」が歴史家の批判的な眼を内に含み、それを排除するのではなく、それを超えるものであるべきだといおうとしているのかも知れない。

師ブルクハルトに深く傾倒し、畢生の大作『ヤコブ・ブルクハルト伝』を彼にささげたケーギの心情を思うと、かの「忠告文」の真意は、その様に解すべきかも知れない。(小論、第十一章1節参照)

七

- (1) 小論第二章の冒頭に述べた様に、伝記の完全な分類は難事である。以上の分類も一応のものに過ぎぬ。その上、以上の分類は、小論の目的上、筆者が伝記を書く原動力となったものの性格を規準とした為に、思わぬ欠陥を生んでいるかも知れぬ。然し、私の知る限りでは、今まで世に行なわれて来た伝記の大体は、以上に分類した何れかの種類に属する。尤も、特殊な例外がありうるし、また、何種類かの性格を兼ね具えた伝記や中間の性格の伝記が存在する。

小論で「伝記」を書く原動力となったものの性格を規準として試みた伝記の分類の結果を示すと次の通りである。

利用された伝記

好事家的伝記

文学的伝記

「思い出」の類(「文学的伝記」と「自己目的・自足的伝記」の間)

歴史的伝記

精神史的伝記

記念碑的伝記(「思い出」と「歴史的伝記」の間)

自己目的的・自足的伝記

- (2) 前出拙稿、「伝記者のころ」320頁及び前出拙稿、「伝記について三」65—69頁参照。